

オンデマンドとリアルタイムを組み合わせた双方向的ブレンド型講義により学生同士の能動的な学びを実現

全学オンライン化の方針を受けて、迅速に取り組むべき課題を把握し、適切なオンラインツールを選択して授業を行った田中先生。Waseda Moodle をプラットフォームとしてオンデマンド型講義とリアルタイム同期型講義とを組み合わせることにより、対面授業が不可能であった期間にも質の高い講義を維持し、さらに、システム上のディスカッションツールやクイズ・テスト機能、外部のゲーム型授業応答システムなどをフル活用したことにより、オンラインの特性を活かした能動的な学びの場を提供することに成功した例といえる。



田中 祐輔
早稲田大学 非常勤講師

授業開始の繰り下げ期間を利用した課題把握とオンライン化に向けた綿密な準備

田中先生は以前から授業にアクティブ・ラーニングを取り入れてきたが、コロナ禍における授業のオンライン化に伴い、早稲田大学の ICT 環境とオンライン授業の特質を生かした科目運営に取り組んだ。それまでの経験から得た知見と、様々なオンラインツールを適切に活用した非常に効果的な方法だったといえる。

2020 年度春学期には 11 名がこの科目を履修した。大学院生ということで、学部を卒業してすぐ大学院に入学した学生のほか、留学生、社会人経験がある学生も履修しており、年齢も幅広く、多様なメンバー構成だった。

授業開始を 4 月 20 日（その後状況に対応し 5 月 11 日となった）に繰り下げるという旨が大学教務部から発表されたのが 2 月 25 日だったが、この繰り下げ期間に大学からオンライン授業に関わるさまざまな情報共有がなされたおかげで十分な準備ができた和田中先生は振り返る。具体的には、大学から発せられた総長の方針、3 月 25 日に日本語教育研究課長より発表された「2020 年度春学期授業運営方針について」、2 日間にわたって開催された「新 LMS システム『Waseda Moodle』に関するオンライン講習会」、また、情報企画部情報企画課が提供する「IT サービスナビ」といった、オンライン化に対する方針と、ツールの使用方法講習、想定されるトラブルと対処法などが大変役立ったという。

グループ分けした配信などで柔軟に対処し結果としてより主体的な学習が可能に

田中先生はまず、全学方針と、日本語教育研究科長発表の「2020 年度春学期授業運営方針について」に基づき、受講生たちが直面するであろう問題について大きく 2 点を把握した。1 点目は国内外から履修する学生の環境的課題（デバイス・回線速度・通信制限）、2 点目は履修学生の心理的不安と物理的問題（各受講生が国内外に点在・図書館や大学に通うことの困難・学習時間確保の難しさ）であった。1 点目に対処するには「高速回線・PC・タブレット」、「スマートフォン」、「通信制限あり」という 3 グループに分けた柔軟な配信が、少なくとも初期には必要だと考えた。2 点目に対しては全体的な方針として「課題とニーズに対応したメディアと手法の適切な組み合わせが求められる」と認識した。

これらを把握したうえで、「国内外から履修する学生の環境や事情に対応するメディアを組み合わせた授業形態」「十分な学習・研究資源の提供と双方向性が確保された手法による授業方式」「同期型授業と非同期型授業をブレンドすることで資源不足や時間不足を解消する授業内容」という 3 つの軸を実現することを目標に掲げた。「受講生の中には国外にいて大学に来られない、研究資料が手元にないといった状況の人もいました。また、対面授業に比べ双方向性の欠如や理解に要する時間が増える可能性があることも課題でした。情報収集をし、学生にヒアリングもしながら、どのように解決していくべきかを考えました」。

そこで、授業の構成として、まず、反転授業のためのオンデマンド動画を配信した。

動画は「スライドエリア」「フォーラムエリア」「解説エリア」の 3 つに分けて配信する形にし、低速でアクセスする場合でも不都合が生じないようにファイルサイズを分けた配信や音声配信なども行い、受講生がおかれた環境や様々な事情に配慮した。

講義動画は理論や知識ベースの項目を扱う部分を各回 30 分（全 13 回）にまとめ、Waseda Moodle にてオンデマンド方式で配信。さらに、Waseda Moodle のフォーラム機能を活用し、学生同士が意見を交換し合う場を提供した。「動画を見ているときも手を動かして欲しいと思い、いつでも QR コードからフォーラムで質問や意見の投稿ができるようにしたことで議論が盛んになりました。私も 1 日 4 回以上フォーラムにアクセスし質問への回答を行ったり議論を深めたりしました。さらに教師と学生だけではなく、学生同士の議論や相互学習も実現することができました。日本語教育研究科の特色であり魅力なのですが、海外経験や教育歴を持つ院生や、日本語学習経験を持つ院生もいるため、多様な観点から問題意識の高い質問や意見が出され、院生同士が刺激し合えるレベルの高い議論が展開されていました」。

さらに、Zoom、Google Drive や Google Form、リアルタイムでクイズに取り組むことができる Kahoot! 等の外部ツールもフル活用した。「協働活動は授業に動きが生じ、また、受講生の授業内容への理解も進み、受講生同士のラポールも形成され好評でした」。

また、無償で提供されている国内・海外の日本語教材データベースや大規模オンラインコーパス、デジタルアーカイブといった日本語教育研究のためのデジタルツールも積極的に紹介し、いかなる環境下においても受講生が学びや研究を続けることができるようサポートした。とりわけ、通学や移動ができなかった時期において、大変参考になるという声が多かったそうだ。

学生が「早稲田で学べてよかった」と思える時間と場を提供したい

今後、対面授業を増やしていく際には、オンライン講義のよさを残しつつ、ディスカッションやアクティビティの部分は対面の特質を活かし、さらには、各図書館やシステムといった早稲田大学の資源にも学生が直接触れることのできる授業にしたい和田中先生は語る。「今回の取り組みは早稲田大学が持つ環境の強みをフル活用して、実現した 1 つの例ではないかと思っています。大学側からの明確なビジョンの提示も一教員として心強く大変ありがたかったです。学生からは、今回のブレンド型講義について、自分が教師としてオンライン授業をする際の参考にもなった、具体的な方法論を学べた、自分自身の研究と実践の役に立った、などの声が多数寄せられました。また、私自身もこの世界的な危機において大学の方針とサポートの下、学生とともにオンライン授業作りができたことは教員としての成長にもつながったと感じます。今後も学生たちが「早稲田で学べてよかった、この環境で活動し、さまざまな授業を受けて研究に取り組むことができ意義深かった」と思える時間、教育の場を提供し、日本語教育を通してよりよい社会を築き、世界的課題を解決できる人材を育てていきたいと思っています」。